産経新聞

平成21年11月17日(火) 朝刊 21面

安全・安心を求めて

関西大社会安全学部の試み

組織や制度のあり方も危険誘発

社会の信頼形成が安全維持に大切

土田昭司教授(リスク社会心理学)

感情によってどのように安全や危険が認識されているかを研究している。また、マスメディアによる科学情報報道を専門家である科学者がどのように評価し、科学者自らはどのような情報発信をしているかを欧米の学者とともに研究しており、その成果は昨年、アメリカの科学誌サイエンスに掲載された。

一般の人々にとって、科学技術が高度になればなるほど、例えば遺伝子組み換え食品、原子力の平和利用、ナノテクノロジーはもちろんのこと防虫剤や食品添加物などについても、自然科学の専門家が説明する安全や危険を完全に理解することは困難であろう。

地震や火災、疾病のメカニズムについても同様である。

それにもかかわらず、私たちは専門的な知識などなくても、日常生活において、自分たちにとって何がどれほど安全、危険であるかを判断し、生活している。

リスク心理学は、科学技術の論理だけでは説明できない安全、危険についての「心のプロセス」を明らかにする学問である。

リスク心理学の研究領域を3つに分けるとすると、まず1つは、リスク認知・社会的合意形成についての研究領域がある。

人間の安全、危険認知にはさまざまな心理的偏りがあり、またそれゆえに、専門家による「安全、危険評価」と、一般住民などの「安全、危険認知」は必ずしもいつも一致するわけではない。

現代社会においては、安全、危険にかかわる事柄、例えばダムや工場の建設などを社会的合意形成なしに実現することはできない。住民、専門家、行政、企業などさまざまな立場の利害関係者の社会的合意形成のやり方を理解するために、社会心理学的知見が重要視されている。

2つ目は、自然災害や社会的危機に対する人間の行動についての研究領域。自然災害や社会的危機が発生している状況においては、平常時とは異なる安全、危険認知や対応行動がとられることが多く、ときにはパニックが生じることさえある。緊急時における個人・集団・組織の対応行動を明らかにする社会心理学研究が必要とされている。

3つ目は、ヒューマン・エラーについての研究領域。危険や被害が主として人間に起因して生じることがある。そのようなリスクはヒューマン・エラーとよばれる。ヒューマン・エラーは人間工学的な観点から研究されることが多かったが、今日では、組織や制度のあり方もまたヒューマン・エラーを誘発させる要因として着目されている。

社会安全学部では、人間の安全や危険についての知覚・判断の心理的法則がどのようなものなのかを、社会心理学の立場から教育したい。そして、感情と意思決定の関係などのこれまでの研究を進展させるとともに、私たちが合意(社会的合意)に至るメカニズムを信頼形成などの概念をもとに明らかにしたい。

つちだ・しょうじ 昭和32年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門はリスク社会心理学。平成9年より関西大学社会学部教授。日本リスク研究学会会長など歴任。日本心理学会研究奨励賞受賞。来年4月社会安全学部・大学院社会安全研究科教授就任予定。

9月、建設中止を表明した群馬県の八ツ場ダムを視察する前原誠司国土交通相ら(矢島康弘撮影)。土田教授は「社会の合意形成にも社会心理学による分析が有効」という